

鎮守府は恋に踊る

とほくれす

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

クソザコ転生指揮官が指輪贈るまでをねっとりじっとり綴る話。  
なお、贈る当人は親愛程度の模様。

4	3	2	1
31	21	11	1

目次

「……………なあ、赤城はなぜか分かるか？」

夜。艦も減り始めた食堂で思い詰めた表情の空母と、それを冷たい目つきで見つめる空母で合わせて二隻。二人用の席で向かい合っていた。

長い射干玉の髪と狐のような耳が特徴の空母、赤城。彼女は向かい合うエンタープライズを冷たく見据えたまま、呆れたように息を吐いた。

「なんで私なのかしら」

赤城が問う。銀髪の方——エンタープライズはグラスの水を見つめると言葉に詰まらせた。

銀髪の髪に紫水晶のような澄んだ瞳。赤く歪んだ赤城の昏い目とは対照的で、赤城はそんな彼女が嫌いだった。

エンタープライズが脱げそうだったチエスターコートを肩のすぐ下まで押し上げる。

「赤城は指揮官をいつもストロキ——見ているだろうか？ あなたなら何か分かるだろうと思って」

「ものを尋ねようという立場にしては言ってくれますね、エンタープライズ？」

——これでオブラートに包んだのだが。

赤城の指揮官への好意は常軌を逸していた。指揮官もそんな彼女の激しい——いや、敢えて言うなら「重すぎる」愛には頭を悩ませているのも事実。少し空回りした悩ませ方をしているが。

とはいえ今は相談を持ち掛けた側。言いたいことは飲み込む。

一方、赤城も意外なことだが気を回している。

普段なら取り合うこともなく無視をするだけの話なのだが、今日のエンタープライズはどうにも覇気がなくて張り合いに欠ける。彼女はエンタープライズを好ましく思うことなど天地がひっくり返ってもないのだろうが、それ以上に空回りしているのを見るのに耐えられない。

「それで？ お前が指揮官様に避けられる、なんて絵面は想像ができないのですが」

赤城の言う通り、エンタープライズと指揮官の関係性はかなり良好な部類に入る。余程の意見の食い違いでも無ければ仲違いが想像もつかない。

盲目的な愛を向ける赤城だが、決してその現実が見えていない程視野が狭い訳でもない。というより、盲目的に指揮官を見ているからこそ好意や意図は容易に汲み取れる。

だから想像できない。赤城の私情を抜きにするなら、上官と部下としては殆ど最上級——もしくはそれ以上の関係性に見えるのは間違いないのだから。

「私だって初めてだ……だから聞いているんだ」

エンタープライズがわざわざ嫌われている筈の赤城にまで縋るのはそういう理由だった。

表情に陰りを見せるエンタープライズに赤城は苛立ち気味に言い捨てる。

「知りませんよ、機嫌を損ねることも言ったのではなくて？」

そうなのだろうか、そう言うのとエンタープライズは真面目に考え出す。

——いや、適当に言ってみただけなのですけど。

赤城は妙に真面目なエンタープライズにほとんど困り果ててしまう。

彼女達の反りが合わない事に敢えて明確に理由をつけるなら、どう言ってもカンレキに依るものが大きい。真珠湾攻撃、ドーリットル空襲、そしてMI作戦。順風満帆であった赤城の戦績に陰を生み、そして終止符を打った者こそがエンタープライズだ。

そしてこの性格。エンタープライズは真面目で、普通で、真剣で、強い。不真面目とは言わずとも、常識と遠いアウトローに生きる赤城としては眩しい、というより眼が灼けるような目障りな存在だった。

呆れた赤城が仕方なく新しい案を提供した。

「直接お聞きなさいな、私に聞くなんて遠回りも良いところでしょう。」

お得意のスケコマシスマイルで指揮官様をコロつとダメせば答えは得られるでしょう?」

「スケコマシ、とは随分な言われようだな……………ははは」

言った側から覇気のない笑みを見せるエンタープライズ。赤城は小さく鼻を鳴らした。

——言い返しもしないのがシヤクにさわるのよ、お前。

この態度だって赤城は苦手だ。他と比べて明らかに当たりがキツかったり、棘のある言葉を向けてもエンタープライズは反撃の兆候を見せない。

流星に避けられたりこそしたが、赤城なら恐ろしい報復をするところだ。手ぬるい。

「聞けば良い、というのは全くの正論だ」

「そう思うのなら、私にいちいち聞かずに——」

「……………聞くのが怖いんだ」

は、と赤城が思わず聞き返す。

エンタープライズも海軍カレーを食べ終えたか、と思うとグラスを煽って目を伏せる。

「だから、怖いと言った」

「寝ぼけてます? 真つすぐ行って右ストレートみたいな性格だと思っていたのですが?」

「右ストレートはともかく、自分でもそういう性格のつもりだ」

乾いた笑いで誤魔化したエンタープライズに赤城が少しばかり苛立つ。

——調子が狂うわ。本当に、イヤな女。

掴みどころのない飄々とした立ち居振る舞いをする空母では有ったが、今日は加えて頼りないと来た。吹けば紙飛行機のように飛んでいく勢い。

流星に赤城も気色悪いというか、本格的に心配し始める。

「何が怖いのですか」

「……………もし、嫌いになったと言われたら。なんて考えてしまうのだ」

「コフツ!？」

赤城が吐血した。

——何、ひよつとしてギャグで言っているのでしょうか!？」

急いで近場のティッシュで口元を拭い取ると、少し血相を悪くした赤城が食い気味に目を血走らせる。

「そ、それで? 続けなさい」

「い、いや。血を吐いたじゃないか、とりあえず医務室に——」

「続けなさい、と言ってるのよ」

赤城が紅い瞳で睨めつけると、蛇に睨まれた蛙のようにエンタープライズが止まってしまう。

彼女の視線は理由はともかく妙な威圧感を常に帯びている。本人はいつもなるべくニコニコしているつもりだし、別段物騒な言動ばかりしているわけではないがこうなってしまった。

この時ばかりは妙な目つきも役に立った、と赤城は内心ガツポーズ。

「だ、だが乗り気でもないのだろうか? 無理にとは」

「つまらない恋愛漫画でも山場の前まで来れば読まずにいられないモノでしょう!?! いいから早く続けなさいな!」

「は、はい……………」

一人で沼に嵌ってしまったている赤城に巻き込まれる形で有耶無耶に納得してしまうエンタープライズ。

——というか、なぜ恋愛漫画が引き合いに出てきたのだ?」

勿論エンタープライズはさっぱり分かっていない。一応赤城を氣遣って早く終わるように話を軽く纏めてから喋りだした。

「指揮官と言葉を交わすのが最近はとても怖いんだ」

「はい、それで?」

「何か喋る度にどう思われているか気になるし、前までは食事に誘うぐらいは何ともなかったのに今はためらってしまう」

「はい。次」

「ちよつとした態度を思い出して、嫌われたのではないかと不安にな

る」

赤城は目に見えて不機嫌になった。

「——何でお前は私に砂糖を吐くのかしら、何で私はそれに何だか謎の満足感を感じてるのかしら、分からないわ。全部分からない、やっぱりお前は嫌いよ」

「な、なぜだ!? 理不尽な!？」

珍しく動揺したエンタープライズが頭から帽子を落としてしまう。赤城からしても同じような反応だった。前々から妙な所が抜けているな、程度には思っていたがそこまで重症だとは思っても見なかっただろう。

大体、その見た目に反して初心すぎてまさしく砂糖を吐かれている状態。最早砂糖シャワーである。

赤城は溜息をつく。エンタープライズはさつきから妙な様子の赤城が怖いのだろう、溜息一つでピクリと肩を震わせた。

「……………ええっと、一応聞きますが自分で分かりませんか？ 何だか漫画で見たなー、とか聞いたことはあるなー、とかで心当たりは？」  
「あつたら赤城に聞きに来ない」

「……………はあ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

えげつない長さの溜息が漏れる。言葉も出ないという感覚を久方振りに味わった気分らしい。

——娯楽も一般常識も足りないのが私達ですが、こういう弊害が出るのってどうなのかしら。

赤城とは思えない真つ当な上層部への不満と、わざわざ聞かせに来たエンタープライズの嫌がらせとしか思えない言動への恨みと、昼間に指揮官に頼まれた事——その他諸々、出来るだけ、吐き出せるだけ赤城の全てが次の一言に籠められた。

「そういうのを巷では恋と呼ぶのよ。私に話をするヒマがあつたらアプローチでもしてくることね、この根性なし」

「なっ!?!——根性なしだと!?!」

妙な所に反応するエンタープライズに赤城はいよいよ体調を悪くした。



目が覚めると、最初に映ったのは見知った天井。と言っても、数えるほどしか見たことのない医務室の天井だが。

あのまま運ばれたのだろうか、赤城は特に記憶がない。確かエンタープライズをやたらと言いたい放題言ったことまでは彼女も覚えているのだが、直近の記憶を辿ろうとすればするほど曖昧だ。

「赤城、一体何が有ったんだ？ とてつもなくうなされてたんだが」ふと横を見ると、心配そうに赤城の手を握る白づくめの優男。

白い執務服に乱雑にくぐられた黒髪が特徴の指揮官だ。彼の目は重桜でも珍しい純黒で、何でも彼自身が自分以外でそんな人間は見たことが無いのだとか。

握られていた手の暖かさに気付いたのだろうか、赤城が顔を発火したように赤くすると手を乱暴に振りほどく。

——あ。

赤城よ、時既に遅し。

「え!?! あ!?! いえ指揮官様これは深い事情が——!」

「いや、良いんだ………やっぱり男に手を握られるのは気持ち悪いよな俺もそうだろうと思うよ………」

「違います! 違うのです指揮官様!」

項垂れて軽く涙すら浮かべる指揮官に肩を持って必死に弁明する赤城。

彼は転生者——もつと直接的に言ってしまうえば、貴方読者に限りなく近い存在だ。故に彼には『美少女に俺がモテる訳無い』という強い固定観念が在り、この通り赤城の行動も曲解してしまう悪癖が有る。

これが中々曲者で——いや、本題に戻ろう。

指揮官は良いんだ、と肩から手を払うと力なく笑って仕切り直す。コイツはこういう奴である。

「それで、良ければ何で倒れたのか聞きたいんだ。今後も取り計らいが必要かもしれないしな………」

「ああ、そういう事でしたら——!?」

赤城が喋りそうになったところを口を塞いで思考を巡らせる。

—— 待て、待つのよ赤城。エンタープライズが好意を持っていてるだなんて情報が指揮官に渡ってしまっただけは大問題よ！ 何よりエンタープライズの方に問題しか無いのにもしものことが、いえそんな事は無いでしょうけれどあってしまっただけは困るわ!? そんなふわふわした女に指揮官様を任せるだなんて屈辱私は許しませんよ！

何やらいろいろ考え込んだが、結局の所

「ええっと、少し立ちくらみを起こしただけです。きつと先日日用があって夜更かししてしまったので、それが響いたのでしよう。ふふ——

—— ははははは！」

明らかに不自然な上ずった笑い声に、指揮官は首を傾げつつも

「……………そ、そうなのか。それなら良いんだ」

と言つて話を済ませてしまう。何故此処まで露骨なのに疑えないのだろうか。

指揮官は良かった、と心から安心したように笑う。

「赤城が原因不明の奇病とかだったらどうしようかと。俺の貯金じゃ足りないだろうしなあ……………」

「心配症ですね、指揮官様は」

さり気なく自分の貯金で善処しようとする辺りがこの男のあざといというか、好かれるポイントだったりする。彼は普通である以上に腹立たしい程の善人なのだ。

姉を心配する子供のような言動に赤城も頬が緩む。

—— そう言えばあの女はどこでしょうか。

「指揮官様、エンタープライズはどこへ？」

「え？ エンプラちゃんなら何か難しい顔してどっか行っちゃったぞ、赤城は任せたって言われたから俺が此処で見てたって訳だ」

—— 仇敵ながら過去最高にナイスよ、エンタープライズ！

内心ガッツポーズ。恐らくエンタープライズにはこんな様子の赤城が想像できただろうし、だから指揮官に任せた面があるのだろうか其処まで赤城には気が回らない。

手の感触を気持ち悪いほど脳裏で反芻しながら赤城が続ける。

「何か言っていましたか？」

途端に指揮官が頭を掻いて

「あー、えーつと、それは、あのだな……………」

と歯切れの悪い返事になってしまう。

——やっぱり、そういう事ね。

赤城はカレンダーが7月であることを確認するなり、指揮官に詰め寄って尋ねる。

「指揮官様、エンタープライズにサプライズでも考えておいでですか？」

「何故バレたし」

赤城は最初からおかしいと思っていたのだ。

エンタープライズは赤城が嫌いこそすれど、人に辛く当たられるような性格とはとても言えない。

「指揮官様のことでも、赤城に分からないことなんてあるはずがありませんわ」

好意が一方通行な事実には気付いていない疑惑が有るが、まあ言っても仕方ないところである。

指揮官が降参、とでも言わんばかりに手を上げると言いにくそうに事情を喋り始めた。

「いやー、それで頼み事が有ったから来たのが3割ぐらいの本音でな……………」

「指揮官様たつての頼み事なら赤城はどんな事でも快諾いたしますわ」

それは心強い、とにへらと笑う。

——指揮官様は隠し事が下手な方ですから、避けるような形になっても仕方ありませんね。

要するに、二人共何らかの好意的な感情が一方通行というわけである。

指揮官は暫く言葉を選びかねるように視線を右往左往させて悩んでいたが、段々と決心がついてきたのだろう。最後には意を決したよ

うに真つ直ぐに赤城の眼を見た。

「エンプラちゃんへのプレゼント選び手伝ってください！　お願いします、この通り！」

頭を下げて手を高く合わせる。予想がついていたとは言え赤城はトンカチで殴られた気分になる。

——いえ、分かつていました。指揮官様はそういう方ですもの、だから私は愛しているのですもの。けれどこれはやはり愛の試練ね疑いようもないわ。

けれど愛する者の頼みと有つては赤城も躊躇うことはなし。引き攣った笑顔を必死で続けながら

「わ、分かりました……………一航戦の名に懸けて尽力させていただきますでしょう……………」

と仕方なく快諾するしか無いのである。

惚れた弱みとは、まさしくこのような事を言うのだろう。

昔の話だ。

『素直で誠実に生きていくのが願いだ。だから意見があつたらこつちから遠慮なく言わせてもらう。そつちも考えがあつたらなんでも遠慮なく言ってくれ』

彼女はそう言つて力を振るつた。

今では何故そんな事をわざわざ言つたのかが分かる気がする。それはきつと、彼女がそうでありたかつた———実の所それだけなのだ。

他人に素直に。他人に誠実に。他人に。他人に。他人に———

——けれどそこには、いつも自分が足りていない。

彼女は強い少女だった、それは実力だけでなく心もだ。俺に比べてずっと問題をよく見据えていたし、ずっと多くの問題に立ち向かつて

きていた。

——だから俺は、彼女に甘えてしまった。

強さに。正しさに。俺は弱い人間だと開き直って、彼女の在り方に甘えてしまった。

今でも思う。アレは大きな間違いでしか無かったのだ。

『天の光は全て星、海の光は全て敵………指揮官、争いのない日は果たして来るのだろうか』

俺は彼女が見せた光に眼を眩ませた。正しさに寄りかかった、彼女の在り方を肯定してしまった。

——最低だった。

その強さが何で出来ていて、その先に何が有るのかを俺は何も見なかった。

俺はまるで彼女を、英雄か何かと勘違いしてしまった。当然に正しくて、当然に強いものだと思いきんでしまった。

彼女はどれほど強く見えても、正しく映っても——

結局の

所。少女であることを、俺は失念してしまっただ。

「好き……好き、か」

廊下。エンタープライズは上の空で呟いて、祈りでも捧げるように胸の前で手を軽く握った。朝陽に照らされる姿は敬虔な修道女にも似ている。

——実感は無。理由は知らない。意味は恐らく、無い。

言われてみればそうだったのだ。条件なら確かに当てはまる、けど彼女にはそれがよく分からない。

『そういうのを巷では恋と呼ぶのよ。私に話をするヒマがあったらアプローチでもしてくることね、この根性なし』

赤城に相談するとそんな事を言い捨てられた。彼女には誤魔化して笑うことしか出来なかった。

——分からない。

本当に分からなかったのだ、自分が『指揮官』という存在をどう思っているかが見えていない。

好意を持って接していることは流石に分かる、彼女にだって好き嫌いは以前から有るし自覚も有った。だが、恋愛感情だと言われてもはいそうですかと領けない。

「大事な物は分かる。けど、愛する人なんて——」

——分からない。心の底から、どうしようもなく理解できない。

その原因は無理に纏めるなら彼女の半生全てである。

彼女は自分の為に戦ったことがない。

例えば人類の繁栄の為。

例えば名も知らぬ誰かを助ける為。

例えば命を賭した誰かの想いを繋げる為。

正しいことばかりしてきた、『正しいことだけ』をしてきた。何故って、それは誰もが喜ぶことだったから。彼女は少し、ほんの少しでも誰かの陰りを、不安を、未練を、悲しみを吹き消したかっただけ。

だから彼女は自分をよく知らない。強いのは他人<sup>誰か</sup>の為、正しいのは他人<sup>誰か</sup>の為、止まらないのは——それは誰の所為だったか、分

からない。

ともかく、彼女は自我から目を背けてきた。それは誰かの為に生きるのに邪魔だったから。彼女は自分の望む在り様のために、自分の望みを全て捨てた。

——それは逃げているんじゃないか？

「分からないんだ、ウソじゃない」

何かに縋るような心細い面影のまま歩く、朝陽は彼女を容赦なく照らし続けた。

——今、彼はどうしているだろう。

ふと指揮官のことが頭を過った。彼はエンタープライズに明確に影響を与えた人物だ。

彼女はかつて武器になろうとした。それは彼女の望みに最適なカタチだったのだ、何せ心は壊すだけの存在には不要だから。

無敵そのものに意味はなくとも、担い手が居れば。彼女は信じて心を擦り減らした。

けれどそんな彼女が今こうして悩むのも、どうしようもなく彼の所為だ。おかげ

「……………おはよう」

気づけば彼は目の前で手を振っていた。何だかそれはとても大事なことで、凄く暖かい気がしてエンタープライズは自然と笑う。

「おはよう、指揮官。珍しく早いな」

「お、おう……………それはそれとして。何か有ったのか？」

何処か不安げに見つめてくる指揮官に、エンタープライズは少しだけ呆けてしまう。

——何だ、妙に察しが良い。

「何故そんな事を？」

「いや、エンプラちゃんがこの距離まで俺に挨拶もしないなんて珍しいからな」

彼とエンタープライズの距離はあと一歩でぶつかる、それ程までに近かった。

咄嗟に何故か数歩下がってしまう、顔が見れなくて彼女自身が感情

を説明できない。

——何だろうな、こういうの。

「あ、近かったな!? 悪い悪い、俺パーソナルスペースがめっちゃ短いらしくてさ!?!」

「……………いや、不快だったんじゃない」

「え?」

——今なら聞けるんじゃないのか。

顔を見上げて指揮官の眼をじっと見つめる。後は一言こう言えばいい——『近くにいと、何だか浮ついてしまう』と。

言葉らしきものを作ろうと彼女の唇が小さく震えた。震えたけれど言葉は出ずに、とうとう彼女が諦める。諦めた自分に、彼女は何処かホツとした。

まるでそれを知られるのが怖いかのようだ。

「——それより」

そんな話題を逸らす言葉ばかりがスラスラと出てくる。

——何で。

「赤城はアレから大丈夫だっただろうか?」

——どうして逃げる。

顔は笑っているのに、心は自分に憤るばかり。

表情に明確な嘘があった。エンタープライズ自身がその言動に戸惑ってしまう。

「大丈夫だったぞ、立ちくらみらしいし」

「そうか——彼女は無理ができる人間だからな」

——それは、私も同じじゃないのか。

何だか緩やかな誘導をしている感触に心の内側が気持ち悪い。

何かに気付いて欲しがっているなら、そう言えばいいだけのこと。いつも自分にそう言って聞かせ、そうしてきた彼女にはそうする意味すら分からない。憤るところか、苛立つところか、理解が出来ないのだ。

「目を離さないようにしないと、いつか壊れてしまうかもしれない」

——本当に目を離さないで欲しいのは。無理をしているのは。



ちやんと見て欲しいのは。

とうとう思考の全てが逃げてしまった。また見失った本心がチクリ、チクリと傷を作っていく。彼女はそうすることしか知らない。

今までずっと本心から逃げてきた。他人の為のカタチに慣れきった彼女には簡単すぎることで——同時に、最も残酷な方法だ。

自分から逃げ続けるなど不可能で、勿論それを知っていて。

じわり、じわりとその体は蝕まれる。鉄になって、武器になろうと努力する。

——生まれた感情から逃げられないだなんて、私は思い知っている筈なのに。

嘘を一度つくくと、簡単に正直者には戻れないものだ。誠実でありたいと言い続けてきた自身の本心を、少しだけ彼女は理解した。

「ふーん、やっぱり根性無しね。お前」

「……………そうかもしれないな」

また張り合いがなくて、最早赤城としては目障りという感情が強くなっていった。

——朝からコツチに来たと思っただらこの反応。何なのよお前は。いつその事叩き潰す気力も湧かない。

赤城は張り合いが無い敵を蹂躪するのは嫌いだ。指揮官の命ならば至上命題の為に関係ないが、個人的な恨みライバル視の類ならそれは一貫している。

——要するに、今のエンタープライズは都合が悪い。

雑な言い訳をして赤城は意を決する。

「ああもう！ 何なのかしら、やっぱり嫌いよ。お前なんて！」  
「……………そう言われてもな」

——何で八つ当たりしてるのかしら。

何処か冷静に自分を扱き下ろしながら赤城は食事を止めてぴしゃりと指差す。

「そんな調子ではこっちが嫌になります！ 私のところに来るというのなら良いでしょう、精々最善を尽くして玉砕できるように手は貸してあげようじゃありませんか!？」

「……………は？」

きよとんとした顔で赤城を見つめるエンタープライズに怒鳴り散らすような剣幕で机越しに詰め寄る。

「今のお前は見ているだけで虫酸が走るわ、せめていつもみたいなヘラヘラするぐらいには戻ってもらわないと私が困ります!」

「え、いや、そういう話ではなく」

「問答無用！ やるなら徹底的に、効果的にやりますから。昼食が終わったらミーティングルームに来なさい、良いかしら!？」

言い捨てるのと凄いい勢いで朝食を食いだす。

普段はいつも上品に食べている赤城のやけ食いじみた暴挙を見て、呆氣にとられたままエンタープライズの朝食時は過ぎてしまった。

「では作戦会議と参りましょう」

半ば無理矢理にエンタープライズが椅子に座らされていた。赤城のガン見に耐えられる艦など存在しないのだ。

ミーティングルームは言葉通りミーティングに特化した部屋で、例えば部屋の壁はペンを使ってもすぐに消せる。机はつなげたり離したりが容易である、等と言った人数に合わせた柔軟な使用に耐えられるのが特徴の部屋だ。

とはいえ設けたのは良いが、最近は大規模な出撃もないからか出番に乏しい部屋でも有る。作戦会議にはうってつけであった。

「さ、作戦会議……………?」

「そうよ？ セイレーンを墜とすのも殿方をオトすのも上島〇兵を落とすのも本質は同じよ」

「いや最後は違うと思うが」

残念ながら一緒だったりする。

「順序を立て、緩急をつけ、最後で驚つかみ。これはテストに出すから

覚えておくことね」

「テストをする気なのか赤城」

勢いだけで喋っているとしか思えない赤城の捲し立てにエンタープライズもたじたじになる。

——大体、そこまでする必要があるのでろうか？

エンタープライズとしては色恋沙汰は一時のものとしか思えない感覚も強く、ココまで性急になる理由が分からない。

そんな心中を読んでいるかのように赤城は淡々と先に意見を抑え込む。

「あのね、言っておくけど私達の人生なんていつだって一時の感情に尽きることしかないのよ。今ある感情、欲求に正直に向き合えないようでは空母どころか艦失格だと理解なさい」

「は、はい」

「よろしい。では作戦その1——ギャップよ」

エンタープライズは目が点になった。

「ま、待ってくれ。これで好感度など上がるものか？」

廊下の死角でヒソヒソと赤城に尋ねる。

作戦その1の決行中だった。指揮官がもうすぐ曲がって直線の廊下に出る、此処で作戦行動の予定だ。

赤城がはあ、と心底うんざりしたような顔で不機嫌そうに答える。

「ゴチャゴチャとお前は前口上が長いよ。破壊力はあるのだからさっさと行動に移しなさい、ほら」

そう言うと言指揮官が来たのを見計らって赤城は軽くエンタープライズを蹴る。あんまりな態度であるが靴を脱いで蹴った辺りはだいぶマトモな行動である。

バランスを崩してエンタープライズが指揮官の目の前に躍り出る。

「わっ！ どうしたんだエンプラちゃん!？」

「あ、いやその……………」

——さっさと顔見せなさいよ腑抜け幽霊女!？」

赤城は帽子で顔を隠してしまうエンタープライズにご立腹の様子だ。それにしても口に出さないとはいえ言いたい放題である。

珍しくコートを摘んで耳を赤くするエンタープライズに指揮官が首を傾げている。彼としては「何か罰ゲームでもさせられてるのか、可哀想に」くらいの予想をしているのだが全くもって見当違いである。

指揮官はしばらく引き攣った顔でどんな事を言わされるのかと戦々恐々としていたが、ふとエンタープライズの足元を見たかと思うと

「おいおい。膝、すりむいてるじゃないか」

そう言っつてポケットから絆創膏を取り出してしやがみ込む。どうやら朝に考え込みながら歩いて転んだ時の傷のようで、彼女としては非常に珍しいことだ。

焦ったような手付きで絆創膏を貼ってやると満足気に頷く。

「よし、雑な応急処置だ。まあパツと見洗ってるみたいだしこれでも

——

「し、指揮官」

突然、口早に呼ばれたのに指揮官が思わず顔を上げて固まった。

——メガネ!? メガネナンデ!

彼女は縁無し黒いメガネをかけていた。

何故か少し恥ずかしげな表情に、逸らされる視線。妙な空気感に指揮官が思わず顔を伏せた。

——栗山さん以来のメガネ衝撃波だぞコレは!

指揮官は謎のダメージを必死で隠しながら引き攣った笑顔で問いかける。

「ど、どうしたんだそのメガネ! 眼悪かったっけ!」

「いや、最近目疲れするからくもりメガネをかけてみているのだが……………」

——我ながらなかなか上手い言い訳よ赤城!

シナリオ、舞台演出、配役全て赤城がお送りしている小芝居である。ギヤップと言っても世の中には色々なものが有る。髪をかき上げ

た時のうなじだとか、逆にメガネを外した時だとか、急にイメチェンした時だとか本当に無数にシチュエーションが存在する。

赤城が敢えて選んだのはメガネだった。他意は特にない、敢えて言うならモノを使うのが一番ハードルが低いくらいしか考えていない。

ただメガネを掛けているだけだと言うのに、妙にもじもじとした様子のエンタープライズが尋ねる。

「その——似合って、いるだろうか………」

指揮官は鼻血を噴き出して倒れる寸前、恐ろしい程爽やかな笑顔でサムズアップをした後

「百万点———ですかね………」

そのまま後ろにのけぞって倒れてしまうのだった。どうやら相当破壊力が有ったらしい。

「もうしばらくメガネかけてなさい、次」

「何だか変と思われてないか心配になるな、これは………」

赤城としてはメガネをかけているのも一向にアリに見えた。口には出さない、褒めるなど絶対にしたくないらしい。

さて、次の作戦その2は至ってシンプルだ。むしろ赤城としては最初にこれをするべきだと思ったのだが、まさかメガネだけで指揮官が貧血を起こしてそれからふらついて職務に戻っていくのは予想外だった。よって決行は次の日となっている。

要するに、「もつと積極的に会話をする」である。相互理解に最適だ。

今回は朝方で、執務室の前に居た。扉の直ぐ側でヒソヒソと赤城が耳打ちする。

「準備はよろしくして？ 話題は考えてやったのですから失敗したら承知しませんよ」

「赤城は私で遊んでいないか………」

——遊んでないワケが無いでしょう。

まさに外道。

早くしなさいよ、と赤城が扉を開けると凄まじい速度で隠れる。毎度のことだが世話焼きなものである。子供好きだったり、何だかんだ赤城がこの鎮守府で邪険に扱われないのはこういう所なのかも知れない。

扉が開いた音で指揮官が顔を上げてエンタープライズと目を合わせる。

「おはよう、エンプラちゃん。いつもだけど早いな」

「あ、ああ——」

此処からはあまりにぎこちない会話と沈黙の多さ、そして陰で壁を蹴りまくって歯がゆそうな顔をしている赤城しか無いのでカットとなるが、結論から言うると二人は高校生男女レベルのぎこちない会話を1時間ほど続けて終わった。

何となく、気付いている。俺は問題を先延ばしにすぎたらしい。俺はあの時、その大きな何かを取り除いてやれたつもりで居た。それからは誰でもない自分として生きていて、今もそうであると思ってるんでいた。

そう、思い込みである。彼女は未だに囚われたままだ。結局自分を見つけれないままに、頼りない足取りで今日を歩いている。

気付いていたのに目を背けてきた。成長しているのだろうかと思いきんで逃げてきた。けれど最近をよく分かる、彼女は自分が何で出来ていて、何をしたかった存在で、どうして今そうしているのかが分かっている。

俺は何も解決していなかった。また彼女は他人の為に生きるだろう、望んできつとそうするだろう、誰もそれを咎めないだろう。

——だけど、正しいけど。

それは恐らく、俺だけは否定してやらなくてはいけないことだ。

誰かの為に生きるなんてことは間違っている。彼女はもう、十分過ぎる程誰かに尽くしてきたんだから。

「指揮官様、少しお話よろしいですか？」

「え？」

昼間のことだ、赤城が突然俺に話しかけてきた。

いつも無軌道で少し怖い空母なのだが、今日は何時になく真剣。俺は大層適当な男であると自負しているが、その赤城の表情に巫山戯て答えるほどにも適当になれない。

書類を整理して横に重ねる。

「構わないけど、どうした？」

「エンタープライズの事です」

珍しい、と素直に思った。赤城はエンタープライズとは基本的に犬猿の仲で、話題に出すだけでも嫌な顔をするほどだ。

むしろプレゼント選びの助力を快諾したのには驚かされたぐらいだ、何度か土下座するのすら覚悟したぐらいである。本当に基本的には滅茶苦茶嫌いらしいのだ。

赤城は内容を掴みそこねた俺の眼をじっと見つめてくる。

「具体的には？」

「アレは妙です。自己理解があまりに乏しい、私も客観的な目には自信がありませんが——あそこまで『自身のことだけ』に一貫しているのは異常です」

赤城の指摘は最もだった。基本的にエンタープライズに異常など見当たらない、むしろ変わり者だらけの鎮守府では飛び抜けて普通の感性だとすら言っても良い。

だからこそあの自分の見えて無さは気色悪く映るだろう。そこだけ別人のように疎くて、鈍くて、錆びている。

「まるで自分について考えるのを拒んでいるようです」

「それが正解だよ。俺に聞くまでもなく赤城はちゃんと真理についている」

端的に事実だけを答えた。

エンタープライズは自分について考えることだけは出来ない。何



故かは明白だ。

それをしてはあの娘自身が困るから。

「何故ですか」

「本人に直接探りを入れて見たらどうだ？ 俺からは明言しかねるな」

「とぼけないで下さりますか、誤魔化す時にいつも左目だけを瞑るのを赤城は知っていますよ」

そんな妙な癖がついていたのか。自分でも思わず確認してびっくりする。

気障ったらしいことこの上ないのですぐさま辞めようと決意しつつ、バレてしまつては仕方がなく弁明に入る。

「——エンプラちゃん、いや。エンタープライズは自分の事を考えられないよ」

「何故と聞かれても発端は知らない。ただ、どうしてそう言い切るかの理由は有るよ」

『ヨークタウン型二番艦エンタープライズ、着任した』

出会った時点でエンタープライズという空母は完成していた。

当時新米だった俺にだって空気感の違いが分かる。『壊す事』を知っているのと知らないのだと心の在り様は全く違うからな。

彼女は今でもそうだと思うが、殺す、壊す、奪う——それがどういふ事を理解している。勿論それは赤城だって、他の空母だって、駆逐艦だってそうだろう。

だが一際彼女には死の匂いが染み付いていた。どう言えば良いんだろうか、出会った時に既に

【慣れてしまったんだな】

それがはつきりと感じ取れるんだ。

——ハッキリ言うと、今でもあの子は俺を躊躇なく殺せるよ。俺は情が邪魔して、目的がどれほど重要でも正直殺そうなんて中々出来ない。

でも、エンタープライズは俺を殺せる。それが必要なことだって割り切れる。俺がそういう風に強要してしまったのかも知れないが………。

要らない話をしすぎたな、戻ろう。

彼女は鎮守府に来て間もなく艦隊の主力になった。カンレキからして別格の存在だからきつとそうなるのは必然だったんだろう。

装備も覚束ない走りたての鎮守府には過ぎた存在だったけれど、彼女に今でも

『あの頃の経験はずっと活きているよ』

と言ってもらえるのは俺の数少ない自慢だ。

彼女以外にも多くの艦が集まり始めた時期だったから、そりゃあ沢山出撃した。全てが芳しい戦果を得られたわけではないにしろ、結果を出し続けて、戦力が増えて、また出撃を重ねて。繰り返しだった。

いつだったろう。そんな中で少しずつ。エンタープライズの被弾数が増えていくことに気付いた。

さて、本格的に歩を進めよう。ここからは個人的に短く纏めて良い話じゃないんだ。

「どうしたんだ？ らしくもないな」

真っ先に当人に尋ねる、自覚がないだけなら直接聞けば答えてくれる。そういう経験からだ。

最初に俺に言ってみせたように彼女は誰であれ誠実さを重要視する性格だった。例えば俺がふと聞いたような下らない事にも、彼女はいつも考え込んだり即答したり、謝ってみせたりする。

そういう意味で俺は妙な信用をしていたと言っても良いだろう。「彼女に限って誤魔化しなんか」、そういう意識が有った。

キャラクターなどそんなものと侮って失敗したのは腐るほど有ったのだが、所詮俺は凡人。何度も失敗して漸く覚える程度なのだ。

「……………別に。集中力を欠いているのかも知れないな」

俺は返答の曖昧さにも驚いたが、それ以上に少し機嫌が悪そうなのが一番衝撃だった。というか初めてだった。

若干引き気味になるとお決まりの文句を告げて離れた。

「そ、そうか。一大事にならない事だけは気をつけろよ、怪我してる女なんて俺は見たくないから……………」

「ああ、分かっているよ」

刺々しい態度を取られた理由は結局今でも分からない。

その後もエンタープライズの被弾は増すばかりだった。全てではないものの俺もついていってみたい訳だが、アレは「死に急ぎ」そのものの動きだった。徒に自分を投げ出すような、作戦にのめり込んで自分を捨てているような危ないものだった気がする。

そして、俺が結局上手いこと何も言ってやれない内に問題が起きた。

ある出撃で想定外の強襲を食らったのだ。海域の制圧は八割方終わっていただとか激しい前からの増援に偵察機を割き過ぎただとか、言い訳は色々出来るが要するに俺の注意散漫のせいだ。

面子としては前衛に軽巡二隻、駆逐艦一隻。主力に空母二隻と戦艦一隻を配置した航空戦重視の編成だった。海域の性質上その編成が最適だったのだ。

横からの急襲だったのも有るがそんな編成ではまともな戦艦なりが居る『セイレーン』の艦隊を捌きながら前方向を叩けない。軽巡がいる時点で対空に寄った編成だから主力への砲撃を防ぎきれないからだな。

さて、これが俺の数少ない美德なのだが『すぐに撤退を決定した』。

引き際というか、成否の天秤の掛け方だけは自信を持って有ると言える。まあ諦めが早いとも言うか。

「下がろう。今回は俺の失敗だった、このままだと沈む艦も出かねない」

艦隊の全会一致で撤退が開始する。

とはいっても艦隊というのは六隻居て、例えば空母が殿とかいうのはアホである。脆いし咄嗟の反撃の能力に欠けるしからざっくりいうと「唯の的」になる。

だから簡単に言えば熊に出会った時の対処に似た様子になる。相手の方を向いて姿勢を崩さず下がっていく訳だな。熊のアレは賛否両論だが、この撤退の鉄則はセイレーンとの海戦では専ら常識だ。

勿論撤退するなら劣勢な訳だから砲撃の雨あられ、感謝祭、猛吹雪。地獄だった。

被弾は防げず前衛も少しずつ消耗してきて、海域脱出まで後数割となると二隻は戦闘不能に追い込まれていた。

——どうしたもんかな。

俺も奇策を思いつくほど主人公でもなく、黙って蜂の巣になる前に逃げるお祈りに入ったその時だった。

『私が前に出て時間を稼ごう』

唐突に前線に立ったのがエンタープライズだった。

言うまでもないが俺は止めた。何せ無駄としか思えなかったし、無闇に傷つくだけになる——筈だったからだ。

俺の制止も聞かずに前線で発艦を始めたエンタープライズは控えめに言って凄まじかった。今までも驚くような機転や技術を俺に見せつけてきていたが別格だ。

雷撃はたった一撃の致命傷しか打ち込まない。亡霊どころか動く飛行場だ。

だけど問題は有った。段々と、段々と前に出ていたのだ。

「前に出過ぎだ！ コツチに戻れなくなる！」

俺の注意も聞かずに発着艦を続けた。少しずつ被弾してきて、発着艦がやつのこと——それぐらいで漸く海域を抜けた。

帰投してすぐにエンタープライズは倒れた、後で聞くと「むしろマトモに動いていたのが不思議だ」と言われてしばらく目の前が真っ白になったな。

ここからが本題だ。彼女は数日と経たずに目覚めたのだが、俺が見舞いに行っても目も合わせてくれなかったよ。やっぱりこれも初めての事だったから驚いた。

理由は分からなかったけどもエンタープライズに限って不当な扱いというのはありえない。俺は当たり障りのないその日の出来事とかを話しながら毎日リングを剥いて仕事に戻るようにすることにした。

偶に俺の目を見て何か言いたげな顔をするけど何も言わない。

ともかく待つことにした、だって——正直な所、今までに比べてエンタープライズはずっと『普通の女の子』っぽかったんだ。

気持ち悪いだろうが俺は嬉しかった。人並みに要求が有って、我儘になれる子だったんだなって——安心した。

だから不満はなかったし、むしろその様子を見るほどに笑った。

それが機嫌を損ねたんだろうな。一週間経って訓練に戻る直前ぐらいの頃に、漸く彼女は口を開いた。

「……………一つ、聞いて良いか？」

「良いよ。何？」

即答だった。そりゃあ一週間も一方的に喋ってリング剥いてりゃ、話しかけてくる内容のシミュレートも腐るほどした。返答も考えてあったんだ。

だが質問は意外な内容だった。

「私は何なのだろうか？」

顔を手で覆うと少し怯えたような顔で俺に続ける。

「兵器か？ 兵士か？ 少女か？ 最近、それが全く分からない。私は軍艦にしては感情豊かで、人間に似たものだと言いきるには情に欠ける」

泣いているのか、笑っているのかも分からない。

「指揮官、教えてくれ。一体私は——『エンタープライズ』は何であるべきなんだ？」

その顔と言葉に俺は壁を殴りそうになった。大きすぎるものを失念していたらしい。

今となつては当然に俺が考えていること。

やっぱり、エンタープライズは『普通の女の子』だったんだよ。強いのは求められたからで、正しいのも求められたから。どれだけ強くなつたフリをしても、正しきで上塗りも続けてもそれが変わらない。忘れてはいけないことだった。俺は平凡な癖に、他人が非凡でないことに気づけなかったんだ。

エンタープライズは俺が思うより、ずっと俺に近い存在だったのに。

「私は人を容易に殺せる。心は中途半端で果たして本物なのかも知らない。普通なんて知りもしない——なのに私は『エンタープライズ』と呼ばれ、エンタープライズとして生きているし、そういう風に記憶を持っている」

「——自分を何だと思えば良いんだ？」

震える肩を見て、俺は手段を選べないと思つて抱き締めた。

嫌われても構わないし、二度と言葉を交わさなくなつても構わないし、会う度に罵倒を言われたつて構わないし、距離を置かれても構わなかった。

——今此処で『人の温かさ』を忘れたら、壊れてしまう。

俺は主人公じゃなくて、解決策なんて提示できなくて、正義はあやふやで、弱い。

だから、強く強く心臓の音だけを伝えた。必死で言葉を考えながら、『お前は俺と変わらないんだ』つて表現し続けることしか出来なかった。

「それは答えられない。俺も迷うし、それで自己嫌悪するし、どんな答えにも穴は有るから」

俺に出せる結論なんて精々一つだった。

「だけどお前は『エンタープライズ』なんだよ。軍艦じゃなくて、兵器じゃなくて、兵士じゃなくて、女の子じゃなくて、お前なんだ」

「それだけは絶対言える——だからお前は、何にもならなくて良い」

それが求めている答えだと知っていた。エンタープライズはそれで救われないなんて知っていた。

でも偽善者にはそれが耐えられない、ハリボテでも答えを渡して誤魔化してやりたかった。だって——あまりにそれは惨すぎる。

俺が耐えられないのに彼女が耐えられるわけがない。学んだ所なんだから。

背中を叩いてやるとすぐに耳元で嗚咽が漏れた。馬鹿なことをしたと思ったよ、俺が問題を見つけもせず放置してきたせいで——

——エンタープライズは苦しんだんだから。

「……………だから、エンタープライズは自分を知らないよ。だって俺がそういう呪いを与えてしまったから」

「考えなくていいと、逃げれば良いなんて安易に俺が言ってしまったんだ。その場凌ぎで苦しみから逃げろなんて、無責任なことを言ってあの娘の問題を先延ばしにさせた」

その目は何処か遠くを見つめていた。赤城でもなく、その先の扉でもなく、もっと遠くて昏くて届かないもの。それはとても10代を抜けたばかりの青年の目などではない。

かつての「つまらない人生」を含めた、『指揮官』ではない『彼』自身の目をしていた。

錆びきったその表情に赤城も言葉が詰まってしまう。

「だからそれは俺のせいだ。元々分からなくて困っていたのを、じゃあ見るなど言ったんだから——俺のせいだろうか？」

枯れきった笑顔が赤城に同意を求める。まるで刈り取られるのを待っているようで、目を見れなくなつた。

——それは。だとしても。

赤城は言うべきか言わないべきかかなり迷つたが、しかし指揮官だけの問題とも言えないと見たのだろう。

目を再び彼と合わせると、今まで以上にはつきりとした口調で答えた。

「確かに原因は指揮官様でしょうし、正解とも言いかねます」

——だけどそれで否定するには。

「ですが間違いではなかったと、私は答えさせていただきます」

「指揮官様は難題に対してもがき、足掻き、理不尽に嘆き——

それでも諦めず、一つの答えを見せました」

「私はその答えを否定できません——正解ばかりの人の営みなど、何と意味のないものだろうと思つてしまいますもの」

世の中というものは大層身勝手に、答えを迫るのに答えにも良し悪しが有るし、幾つも有つたりすることばかりだ。

——だから、それはその中ではとても「良いもの」では有つた筈。

それは彼を愛するからではない。誤魔化しからではない。優しきからではない。

一つの問題に向き合つた人間の答えなど、決して容易に否定してはならないのだ。

例え本人が否定しようとも。

「……………赤城には敵わないな、いつもの事だけど」

指揮官はいつもどおりの表情で頬を掻いた。その仕草が決まつて誤魔化しであるのを、赤城は最初から知つていた。

だからこそ愛しているなどと言うのだ。そういう彼を知つた上で、尚愛しいと嘯けるから宣い続けているのだ。

——けれど今は片付ける問題が多そうね。

赤城は肩の力を抜く。

「指揮官様、赤城は少々お暇を頂きますわ」

「……………？　良いけど、何でだ？」



「女の急用などというものは、大抵殿方絡みと決まっていますよ？  
指揮官様」

艶やかに嗤うと赤城は踵を返し、あつと言う間に執務室を後にした。

指揮官は少し見惚れてしまっていたらしく、呆けた顔を叩いて直す  
と

「ようやく好きな人出来たんだな！」

と大変馬鹿なことを言っている。聞こえていたら赤城が倒れてしま  
まうのではなからうか。

——あの女、本当に手が掛かるわ。

そんな迷言など露知らず、赤城は心の中で悪態をつき続けながら彼  
女の元へ向かう。

「私と休憩でもどうかしら、エンタープライズ」

「……………Repeat please.」

思わず母国語に戻るエンタープライズ。訓練が終わって漸く休憩だ、彼女が汗を拭いながら昼食に思いを馳せている時に赤城はやってきた。

——何？ あの赤城が、私と？

思わずエンタープライズが問う。

「だ、大丈夫か？ 頭でも打ったんじゃないか、取り敢えず医療室に……………」

「お前は私を何だと思っているのかしら」

「何って、赤城だ」

——指揮官様の押し売りのつもりなのかしらね、コレ。

赤城は不満そうに鼻を鳴らす、これは鎮守府の誰が見ても10人中9人、いや30人中29人が異常事態と判断するだろう。

最近の会話量の多さだけでも周りからまことしやかに「赤城は罰ゲームでもさせられているのでは」などと囁かれる始末なのに、そりやあエンタープライズも動揺する。

赤城はイライラしてきたのだろうか、急かし始めた。

「それで、はいかいいえかどっちかしら？」

「何故食い気味に休憩の同伴を迫られているんだ……………!?」

全くその通りである。

しかしそんな文句をたれている猶予もないらしく、じわじわと赤城が詰め寄ってくる。

——この圧には逆らえない。

あと一歩で息のかかる距離、という所でお手上げという様子でエンタープライズが手を上げた。

「分かった、分かったとも。戸惑っただけで別に嫌とは言っていないだろう？」

「そう、じゃあ先に席は取っておくわ」

急にあっけらかんと踵を返す赤城に、エンタープライズは頭にハテナマークばかり浮かべたままに片付けに入る。

「……………」

「……………」

食堂は凍りついていた。理由は言うまでもなくこの二人のせいである。

独りで悍ましいオーラを放っていた赤城の前に座るだけでエンタープライズは一苦労だったが、かと思えば黙々と進む食事はもつと辛かった。

何よりその異様な空気感に周りがどよめいてコチラを見ているのがエンタープライズには一番堪えた。何もしていないのに、という意識が有っては当然辛い筈である。

耐えかねたエンタープライズが、漸くの思いで声を絞り出す。

「な、なあ赤城……………一体何の用なんだ?」

「……………お前、指揮官様の何処が好き?」

「ええ!? い、いきなり何!?!」

思わずエンタープライズが素に戻る。食堂に入る半分が彼女の素の声を初めて聞いたもので、どよめきは大きくなる。

赤城は冷たい目つきで「早く」とだけ急かしてくる。

——何で私、こんな所で公開処刑されるんだろ……………。

流石のエンタープライズもタジタジになるが、有無を言わさぬ目つきに仕方なく言葉を絞り出す。

「何、と言われても分からない……………言ったじゃないか、それが本当なのかも分からないと」

「呆れた。言葉に出ないと?」

「そうだ」

赤城が心底呆れた、と言わんばかりに大きな溜息をつく。

「何と薄っぺらい愛なのかしら。お前、本当に好きなの?」

「だから分からないと」

「お前の行動はお前の口より雄弁よ。なのにその幼さ、指揮官様も見る目がありませんわね……………」

やれやれ、とでも言いたげに肩を竦める赤城。何だか小馬鹿にしたような仕草は赤城らしくもない。

——何だ、何がしたい。

何処かオーバーアクションのままに一人芝居が周りだす。

「例えば顔付きであれ評価は有って然るべきじゃないかしら、特にあの目。伽藍堂に精一杯何かを詰め込もうとしているあの目は、人間らしくて堪らないとは思わなくて？」

「……………いや」

エンタープライズの声は静かだった。

赤城は続ける。

「あの歩き方もとても好ましいわ。自信が無いと言いながら、自堕落と嘯きながらもあの整った歩き方。まさしく人間性の写し鏡よ、見れば見るほど愛おしい」

「——別に、そうでもないだろう」

何処と無くエンタープライズの機嫌は悪いように聞こえた。

「無遠慮に喋るようで気を張り巡らせる様子も素晴らしいわ、私はあの手の人間が大層好きみたいなのよね」

「それで？」

赤城がずいと顔を近づけた。

「お前は何故、指揮官様の好きなどころの一つも言えないのですか？」

「そういうものではない」

初めて返ってきた強い否定に、赤城の口元がニヤリと歪む。

——やっとなってきた。

「あら？　誰かが好きだ嫌いだなんて、所作を集めて総合評価するだけのものではないのかしら？」

「違う」

「人を愛するっていうのは、総合的に合格な相手を見繕うことではなくて？」

「違う！」

「では、何ですか？」

「それは——！」

エンタープライズが赤城の胸元を引つ張り寄せるなり、紫水晶の瞳を鋭く輝かせる。

「そうじゃない！　良い所も、悪い所も、嫌いな所も、好きな所も全て含めて尊く思うことこそが好意だ！　そんな何処かの試験の採点のような下らない考え方で、優劣をつけて他者を愛して良いものではない！」

「全て肯定しろと言っているんじゃない。汚点も、弱点も、全て含めて私は指揮官が好きなのだ——ッ！」

赤城の噛いが、止まった。

「……………遅いわ、結論が遅すぎるのよ。お前はすぐ考え込んで、こんな簡単なことも忘れるわ——　愚か、やっぱりお前は嫌いよ」

力むエンタープライズの手を簡単に振りほどくと、つまらなそうに酸素コーラのストローをゆっくりと吸い始める。

「さっさとそれを言ってきたなさい」

「……………何？」

拍子抜けしたエンタープライズが呆けた顔で尋ねる。

「私が根本から間違えていました。お前に小細工なんて無理よ、ストリートしか投げられないピッチャーエンタープライズにカーブを投げさせた監督私の判断ミス」

立ち上がったエンタープライズを、ふいっと片手で席から押しつけ

る。

「な、何だ急に？ 調子が狂う……………」

「さっさと三振を取ってきなさい、ホームランを願うばかりだけど多分——そうね、まあ半々かしら」

「だから何を——」

じれったい女ね、と赤城がうんざりしたような顔でぴしやりと指をさす。

「そのまま言えばいいのよ。どう好きなのか、どう大事に思ってるのか、どうなりたいたいのか」

「お前はそれが一番よ——綺麗事過ぎて、私は嫌いですけどね」

——でも、どうあれそれは指揮官様の為になる言葉。

彼は専らエンタープライズが立ち止まったままだと勘違いしている。それは足枷であり、彼の自信を砕いた一つの要因なのだろう。いや、もしくは彼が自信がないと『思う為の』道具なのかも知れない。

だが。赤城が見るに彼の出した結論はエンタープライズを立ち止まらせたものではないと思えた——むしろ、出会わないよりはずつと前に進んでいる。

何せ、分からない感情を赤城に尋ねたその時から、彼女はきつと昔とは違ったのだから。

——それは、伝えるべきことよ。私に不利益であろうと、敵へ塩を送る行為だとしても、それは解決しなくてはいけない。

赤城はエンタープライズが嫌いだ。指揮官が好きだ。指揮官が好きなエンタープライズはもつと嫌いだ。仲良くなるなんてまっぴらごめんだ。

でも。

——でも？

理由はわからない。

「お前、カーブなんて要らないのよね。ストレートで勝っちゃうのよ……………大嫌い、やっぱり大嫌い」

「でも。指揮官様の為を思って、エンタープライズに私は思いつく限

りの最適解をぶつけて差し上げます。真つすぐ行って攫ってきなさい」

「かくして無事、二人はケツコンしました。めでたしめでたし——

——姉さま、しつかりしてください」

「これか〃飲〃ま〃す〃に〃い〃ら〃れ〃ま〃す〃か〃……………うう〜」

赤城は妹を巻き込んで自棄酒をしていた。

結果から言うと赤城の目論見は見事大成功、二人きりの執務室で二人は愛なんて誓いあってハッピーエンド。影の功労者の赤城は置いてけぼりで、何だか綺麗な感じでトゥルーエンド。

確かに彼女からすれば、かなり辛い内容である。ありきたりで、語るまでもないくらいで、でも良い話。赤城はまあ、仕方ないと。

思おうと思つたが思えない。そりやそうである。

「これでいいのよ、正しいのよ赤城……………あんな癩な女でも！ 指揮官様は選んだのよ！ そうよね加賀!？」

「ま、まあそうだろうな。正しい、大丈夫だ、指揮官はきつと上手く幸せになるさ。ああ、加賀が保証しますとも」

テーブルにへたりこんでメソメソする赤城の頭を撫でる。

「見てなさいよ……………お前みたいないきなり安っぽい恋愛漫画のような顛末になんてしてやらないわ。予想もつかない紆余曲折で最後は私が一位なのよ、お前は負け組なんだからあ！」

「はいはい、姉さま。もう一杯飲みますか」

「飲むわ！」

この晩酌は一夜続き、流石にエンタープライズも次の日から赤城には頭が上がらなくなったという。

拘りなのだろうか。

赤城は「自分が一番だ」とは言うが、二人の関係性について全く否定はしないらしい。口では言うが優しい方なんだ、と指揮官に加賀はいつも笑って返事する。